

第14回日米構造設計協議会

14th U.S.-Japan Workshop on Improvement of Structural Design and Construction Practices
December 3 - 5, 2012 Wailea-Makena (Maui) Hawaii

(株) 梓設計 倉内信幸

第14回日米構造設計協議会が、2012年12月3日から5日の日程で、MAKĒNA BEACH&GOLF RESORT（ハワイ・マウイ島）にて開催された。この会議は米側ATC（Applied Technology Council）と日側JSCA（一般社団法人日本建築構造技術者協会）により企画運営され、1984年から開催されているもので原則2年に1回開催されており今回は14回目である。

開催準備のため2012年10月17日、JSCA会議室に参加予定者が集まり、日本側のトピック担当者の割振りの調整を行なった。その後、Abstractは10月29日、本論は11月26日までにJSCAに送付し取りまとめてATC側に送付した。今回の日側参加者リストは以下の通りで総数16名である。

寺本隆幸（東京理科大）、和田章（東京工業大）、大越俊男（東京工芸大学）、西山功（建築研究所）、福山洋（建築研究所）、伊藤弘（住宅リフォーム・紛争処理支援センター）、西村功（東京都市大学）、五十子幸樹（東北大学）、高山峯夫（福岡大学）、坂田弘安（東京工業大）、福田孝晴（鹿島建設）、篠崎洋三（大成建設）、深澤義和（三菱地所設計）、川村満（日本設計）、長瀬悟（日建設計）、倉内信幸（梓設計）

米側の参加者は16名（会議コーディネーター・テレビモニター参加者含む）の計32名であった。議長は米側ATCからK.Miyamoto、C.Rojahn、日側JSCAからM.Kawamuraと

なった。日米双方とも協議会開始時からのメンバーから、今回新たに参加したメンバーまで、産学官の参加者が活発に議論を交わした。

論文発表は5セッションの計32件で行なわれ、発表後のBreakout Session（約1時間）は参加者を3グループに分け意見交換を行ない、再度全体会議にて各グループでの討議内容の報告を行なった。会議期間中は、Lunch/Evening Party and Dinnerもある情報交換の場としての位置付けとなった。

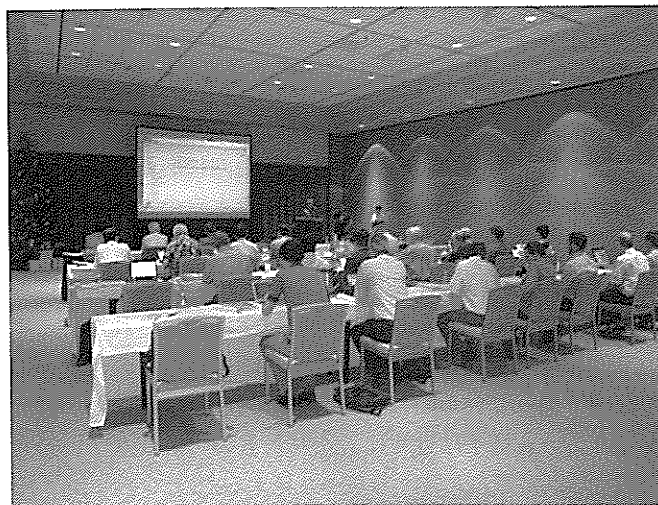
討論内容は、今回の主題であるセッション1の東日本大震災に因んだ被害状況の報告および津波に対する基準提案、日米の耐震基準の相違、リスクや被害規模の評価、免震・制震の有効性等幅広く行なわれた。セッション5のClosing Sessionでは、予定を変更しR.Sharp氏による会議全体のまとめを兼ねた報告が行なわれた。

次回は2015年、米カリフォルニアにて開催を予定している。

今回の会議を通して感じられたことは、米側の東日本大震災への関心が高く報告も数多くされていたことである。これを期に、日米両国の津波・耐震の基準を共有し意見交換を行ない、今回出席が見られなかった20、30代の若手・中堅の技術者も交え世代を超えた価値ある交流が図れることを切に願うところである。



第14回 協議会参加者



会議状況